

『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み

——行持(一)——

伊藤 秀憲

はじめに

『正法眼蔵抄』口語訳の試み』或いは『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み』として、七十五巻本『正法眼蔵』第一

「現成公案」、第二「摩訶般若波羅蜜」、第三「仏性」、第十一「坐禅儀」、第十二「坐禅蔵」、第三十一「諸悪莫作」、第六十三「発菩提心」、第六十七「転法輪」の巻の『聞書抄』の口語訳を発表してきた(『駒沢大学仏教学部論集』第一三〇・二五・二七号、『駒沢大学仏教学部研究紀要』第四一・四三〇・四五・四九・五一〇・五三三号)。

今回、第十六「行持」の巻を取り上げたのは、本学文学部宗教学科の開講科目「禅学特講」で、講読している巻だ

『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み(伊藤)

からである。

次に凡例を示すが、この凡例は、本稿のみに限るのではなく、今後発表するであろう口語訳に共通するものである。

凡例

一、『正法眼蔵』の本文は、大久保道舟編『道元禅師全集』上巻(『道元全』上と略称する)所収のものによる。

一、『正法眼蔵聞書抄』は泉福寺本(大分県泉福寺所蔵)を収めた『永平正法眼蔵菟書大成』(『正法菟』と略称する)一〇一〜一四による。但し、必要に応じて、永平寺本(二六九七年、眉山道庸書写、福井県永平寺所蔵・森福寺本(二七五〇〜五一頃、祖天哲宗所持本、鳥取県森福寺所蔵、『正法菟』

『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み（伊藤）

続輯一（〇所収）・総持寺本（二七五二年、智外鉄忍書写、神奈川県総持寺所蔵）・万福寺本（二七五九年、万仞道坦撰集・贈写、愛知県万福寺所蔵、『正法蒐』二二所収）・玉林寺本（一七七九年、笑巖聯芳書写、駒沢大学図書館所蔵）・寛政五年書写本（一七九三年、駒沢大学図書館所蔵）を参照することとし、本文全体の校訂は行わない。『正法蒐』からの引用箇所を示す場合には、一頁に二丁収載されている時は右をa、左をbとし、二丁の時は上段の右左をa b、下段の左右をc dと表記して、頁数は単位語を省略した。これは他の影印本についても同じである。

一、『正法眼蔵抄』の段落によって『正法眼蔵』の本文を掲げ、その後に、上段に『抄』の原文を載せ、下段にその口語訳を試みた。

一、『正法眼蔵』の本文中に引用される文献の出典については、特にその都度注記しないが、『渉典録』『渉典録統紹』並びに鏡島元隆『道元禪師と引用經典・語録の研究』（木耳社、一九六五年十月）、鏡島元隆監修・曹洞宗宗学研究所編『道元禪師引用語録の研究』（春秋社、一九九五年三月）等の成果を利用していただいた。

『正法眼蔵』の本文

一、『聞書抄』と明らかに異なる場合のみ注記し改めた。なお、をーお、ゑーえ、んーむ等の表記の違いは特に注記しなかった。

一、原則として、漢字は新字体を用いることとし、旧字体は改めた。

一、『道元全』上所収の『正法眼蔵』の本文の漢字に付いているふり仮名は、削除したり改めたりした場合もある。

また、新たに付け加えたものもある。同様に、漢文の読み方も、訳者の考えで改めた場合もある。

『正法眼蔵聞書抄』の原文（上段）

一、『聞書』は『聞書抄』の収載順通り『抄』の後とする。

一、（ ）内には、『正法蒐』の所収頁を各末尾に付した。

一、原則として、漢字は新字体を用い、異体字・略体字・古用仮名文字は本来の字に改めた。

一、振り仮名・送り仮名・行間の書き込み・傍記・欄外の注記等は、可能な限り活字化した。訂正字は訂正したものを活字化し、抹消字は活字化しなかった。

一、原本にはないが、句点を付けた。

一、原本には一部分付いているが、新たに返り点を付けた。

口語訳(下段)

一、『正法眼蔵』の本文の引用、及び必要に応じて注意すべき語には「」を付けた。

一、漢文の書き下しは、『聞書抄』の読み方とは必ずしも一致しない。

一、「(」内には、原文にはないが、補った方が理解に便と

考えた場合、文や語句を補った。

一、「(」内には、書き下し文、原文或いは語句の意味等が必要に応じて記した。

一、「(」は、割注・頭注等の部分であることを示す。

一、「抄」と『聞書』とは、段落の区切りが一致しない場合もあるので、『抄』の段落により、相当する『聞書』の

口語訳の右に〈第〇段〉というように記した。

正法眼蔵第十六 行持上

第一段(一)

仏祖の大道、かならず無上の行持あり、道環して断絶せず。発心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隙かんげきあらず、行持道環なり。⁽¹⁾

此行持ノ行ノ字、教行証ノ行ニアラス、証ヲ不待ユヘニ、所詮以テ仏祖名ニ行持トシテ、道環トハ始中終ニカ、ハラサル儀ナリ、発心修行菩提涅槃ト談スル事、壘モ間隔ナキ道理ナリ、(三a)

この「行持」の行の字は、「教行証」(仏の教えによって修行し証すること)の行ではない。証まことを待たない「行である」から。結局「仏祖」を「行持」と名付けるのである。「道環」(仏祖の大道は円い輪のようなもの)というのは、始め、中間、終わりということにかかわらない(無始無終である)ことである。「発心・修行・菩提・涅槃」と説くこと、「(これらが)すこしの間も間隔へだたりがない道理(が行持道環)である。

『正法眼藏聞書抄』口語訳の試み（伊藤）

第一段（2）

このゆゑに、みづからの強為じょういにあらず、他の強為じょういにあらず、不ふ曾ぞう染ぜん汚なの行持ぎょうぢなり。

実此行持ノ道理、自他ノ強為アルヘカラス、不ふ曾ぞう染ぜん汚なノ行持ナルヘシ、

実にこの「行持」の道理（において）は、「みづから（の強為）」（自ら無理にとめること）「他の強為」（他より無理にとめさせられること）があるはずがない。「不ふ曾ぞう染ぜん汚なの行持」（かつて染汚したことの無い行持）であろう。

第一段（3）

この行持の功德、われを保任し、他を保任す。その宗旨は、わが行持すなはち十方じゅうぱうの市地ち漫天まんてん、みなその功德をかうむる。他もしらず、われもしらずといへども、しかあるなり。

此我ハ行持ノ我ナリ、

この「われ」は「行持」（しているところ）の「われ」である。

第一段（4）

このゆゑに、諸仏諸祖の行持によりて、われらが行持見成ぎんじじょうし、われらが大道通達だうだうつうたつするなり。われらが行持によりて、この道環の功德あり。

是ハ諸仏諸祖ト云モ、我等ト云モ、只同体ナルユヘニ、（三）如ごと此打チカヘテ

これは「諸仏諸祖」と言うのも、「われら」と言うのも、全く同体であるから、このように引つ繰り返して釈とかれるのである。「諸仏諸祖（の行持）」と「われら

被_レ釈ナリ、諸仏諸祖我等行持只一体、ト
リハナタルマシキ道理カ、如_レ此入チカヘ
テ云ハル、ナリ、

「行持」とは全く一体で、別にすることが出来ない道理が、このように入れ違え
て言われるのである。

第一段(5)

これによりて、仏仏祖祖、仏住し、仏非し、仏心し、仏成して、断絶せざるなり。

是ハ行持ノウヘノ仏祖、仏住仏非仏
心仏成等ノ道理、断絶セスト云、

これは、行持の上の「仏仏祖祖」が「仏住し、仏非し、仏心し、仏成」(仏とし
てあり、仏を超え、仏の心もち、仏として成道)する等の道理(であり、これが)「断
絶せず」というのである。

第一段(6)

この行持によりて日月星辰あり、行持によりて大地虚空あり、行持によりて依正身心あり、行持によりて四大
五蘊あり。

日月星辰ヲ行持ト談ス、大地虚空行持、
(四a)乃至依正身心、四大五蘊等、皆是
行持ト云ナリ、

「日月星辰」を「行持」と説く。「大地虚空」が「行持」である。或いは「依正
(依報・正報)身心」「四大五蘊」等が、皆「行持」であるというのである。

第一段(7)

行持これ世人の愛処にあらざれども、諸人の実帰なるべし。過去・現在・未来の諸仏の行持によりて、過去・

『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み(伊藤)

『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み（伊藤）

現在・未来の諸仏は現成するなり。

過去ノ行持ナルトキハ、全過去ノ行持ナルヘシ、現在未来モ如レ此、三世トモ二行持ナレトモ、過去諸仏ノ行持ノ時ハ、現在未来ハカクル、ナリ、是則行持ノ上ノ三世ナルユヘニ、（四b）

「過去」の「行持」であるときは、全て過去の行持であろう。「現在・未来」もこのようである。三世ともに行持であるけれども、「過去の諸仏」の行持のときは、「現在・未来」「の諸仏」は（過去の諸仏の行持に）隠れるのである。これは、「行持」の上の三世であるから。

第一段（8）

その行持の功德、ときにかくれず。かるがゆゑに発心修行す。その功德、ときにはれず。かるがゆゑに見聞覚知せず。あらはれざれども、かくれずと参学すべし。穩顕存没おんけんぞんもつに染汚せんなせられざるがゆゑに、われを見成みじようする行持、いまの当穩とうおんに、これいかなる縁起の諸法ありて行持すると不会ふえなるは、行持の会取えしゆ、さらに新条の特地ちにあらざるによりてなり。

此発心修行モ、菩提涅槃ヲ果ニ置テ談スル発心修行ニハアラス、ユヘニ穩顕存没ニモカカハラス、見聞覚知スル人ナキナリ、

この「発心・修行」も、菩提・涅槃を果において説く、「因としての」発心・修行ではない。だから、「行持の功德は」「隱顕存没」にもかかわらない。「それゆえ」「見聞覚知」する人がいないのである。

第一段（9）

縁起は行持なり、行持は縁起せざるがゆゑにと、功夫参学を審細にすべし。

縁起ト云ハ、実ニモ行持ナルヘシ、縁起ヲ行持ト談スルユヘニ、如レ此云ヘハトテ、又行持ヲ縁起ト不レ可談、

第一段 (10)

かの行持を見成する行持は、すなはちこれわれらがいまの行持なり。

今我等トサスハ行持ノ我々、非ニ吾我、
(五 a)

ここで「われら」と指すのは、「行持」〔しているところ〕の「われ(我)」である。吾我の「われ」ではない。

第一段 (11)

行持のいまは、自己の本有元住ほんぬげんじゆうにあらず。行持のいまは、自己こらいに去来出入するにあらず。いまといふ道どうは、行持よりさきにあるにはあらず、行持現成するをいまといふ。しかあればすなはち、一日の行持、これ諸仏の種子なり、諸仏の行持なり。この行持に諸仏見成せられ、行持せらるるを、行持せざるは、諸仏をいとひ、諸仏を供養せず、行持をいとひ、諸仏と同生同死せず、同学同参せざるなり。

打任ハ本有元住ニカ、ハルト可レ云歟、然而今ノ行持ノスカタ本有元住ニ不レ拘、

普通一般には、「自己」というのは「本有元住」(本来あって常住のもの)に拘ると言うべきか。そうではあるが、今の行持のすがたは、「本有元住」に拘らな

『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み(伊藤)

『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み（伊藤）

ユヘニ自己ニ去来出入スルニハアラスト
云々、古今ヲ超越スル行持ナルユヘニ、

い。だから「行持のいまは、」自己に去来出入するにあらず」というのである。
古今を超越する行持であるから。

第一段（12）

いまの華開葉落、これ行持の現成なり。磨鏡破鏡、それ行持にあらざるなし。

所詮非行持一法ナキ所ヲ如此云々、（五）

結局、行持でないものはないところを、このように言うのである。

第二段（13）

このゆゑに、行持をさしおかんと擬するは、行持をのがれんとする邪心をかくさんがために、行持をさしおくも行持なるによりて、行持におもむかんとするは、なほこれ行持をこころざすにたれども、真父の家郷に宝財をなげすて、さらに他国踰躡の窮子となる。踰躡のときの風水、たとひ身命を喪失せしめずといふとも、真父の宝財なげすつべきにあらず。真父の法財なほ失誤するなり。このゆゑに、行持はしばらくも懈倦なき法なり。

是ハ何トアルモ行持ナルウヘハ、只イタ
ツラニ居タラムモ行持ナルヘシト云邪心
ヲ、多人ノヲコスナリ、其ヲ邪心トイマ

これは、どのようなものも行持であるからには、「行持をさしおくのも行持なり」として「ただ何もしないでじっとしているのも行持であるという「邪心」を、多くの人が起こすのである。それを「邪心」と戒められるのである。何もし

シメラル、ナリ、イタツラニ居モ行持ナレハト云心地ヲ、シハラク猶コレ行持ヲ心サスニ、タレトモトハアルナリ、他国踰躡ノ時節モマコトニ行持ノ外ニハアラサレトモ、此時節ハ真父ノ法財ヲハ未_レ得_ズ、今ノ(六a) 喩ニ尤相応セリ、

ないでじつとしているのも行持であるという考えを、かりに「なほこれ行持をこころざすにいたれども」とあるのである。「他国踰躡」の時も、実に行持のほかではないけれども、この時はまだ「真父(釈尊)の法財」(行持が釈尊の法財であること)を得ていないのである。「妙法蓮華經」の長者窮子の喩は「ここでの喩にもつとも相応しい。

第二段

慈父大師釈迦牟尼仏、十九歳の仏寿より、深山に行持して、三十歳の₍₅₎ 仏寿にいたりて、大地有情同時成道₍₄₎の行持あり。八旬の仏寿にいたるまで、なほ山林に行持し、精藍₍₅₎に行持す。王宮₍₆₎にかへらず、₍₇₎ 国利を領せず。布僧伽梨を衣持し、在世に一經₍₈₎するに互換せず。一盃在世に互換せず、一時一日も独処することなし。人天の閑供養を辞せず、外道の誦謗₍₉₎を忍辱す。おほよそ一化₍₁₀₎は行持なり。淨衣乞食₍₁₁₎の仏儀、しかしながら行持にあらずといふことなし。

仏ハ一時一日モ不_レ獨₍₁₎処、閑供養₍₂₎辞せず、外道ノ誦謗₍₃₎ヲ忍辱ス、是ヲ化導₍₄₎ヲ為₍₅₎先之故歟、

仏は「一時一日も独処」しないし、「(人天の)閑供養(福報を目的とする供養)を辞せず、外道の仙謗(そしり)を忍辱(堪え忍ぶこと)する。これは化導(衆生を教化し導くこと)を第一とするからである。

第三段

第八祖摩訶迦葉尊者は、釈尊の嫡嗣₍₁₎なり。生前もはら十二頭陀₍₂₎を行持して、さらにおこたらず。十二頭陀₍₃₎と

『正法眼藏聞書抄』口語訳の試み(伊藤)

『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み（伊藤）

いふは、

一者不_レ受_二人_一請_一、日_レ行_二乞_一食_一。亦_レ不_レ受_二比丘_一僧_一一飯食分錢財_一。（中略）四者止_二宿野田中樹下_一。（中略）十一者但欲_二露臥_一、不_レ在_二樹下屋宿_一。十二者不_レ食_二肉_一、亦_レ不_レ食_二醜_一醜_一。麻油不_レ塗_二身_一。これを十二頭陀といふ。摩訶迦葉尊者、よく一生に不退不_レ転なり。如来の正法眼蔵を正伝すといへども、この頭陀を退することなし。（後略）

迦葉頭陀ト云是、如_レ文、

迦葉頭陀というのはこれである。（文のとおり）

第四段

第十祖波栗濕縛尊者は、一生脇_レ不至_二席_一なり。これ八旬老年の辨道なりといへども、当時すみやかに大法を単伝す。これ光陰をいたづらにもらさざるによりて、わづかに三箇年の功夫なりといへども、三菩提の正眼_一を単伝す。尊者の在胎六十年なり、出胎髮白なり。誓_二不_レ屍臥_一、名_二脇尊者_一。乃至暗中手放_二光明_一、以_レ取_二經法_一。これ生得_一の奇相なり。（中略）しかあれば、脇尊者、処胎六十年、はじめて出胎せり。胎内に功夫なからんや。出胎よりのち、八十にならんとするに、はじめて出家学道をもとむ。託胎よりのち、一百四十年なり。まことに不_レ群なりといへども、朽老は阿誰_一よりも朽老ならん。処胎にて老年なり、出胎にても老年なり。しかあれども、時人の譏嫌_一をかへりみず、誓願の一志不退なれば、わづかに三歳をふるに、辨道現成するなり。たれか見賢思齊_一をゆるくせん、年老耄_一及_二をうらむ_一ることなかれ。この生_一しりがたし。生か、生にあらざるか。老か、老にあらざるか。四見すでおなじからず、諸類の見おなじからず。ただ志氣_一を専修_一にして、辨道功夫すべきなり。辨道に生死をみるに相似せりと参学すべし、生死に辨道するにはあらず。（後略）

胎内六十年、出胎後八十年、都合一百四十年、実奇代事^キ、実年老耄^{シキ}及^キヲウラムヘカラス、尤志氣^{シキ}ヲ専修^{セム}ニシテ、辨道功夫^フスヘキ、委見^シ文^ヲ、(六^ト)

胎内に六十年、出胎後八十年、都合百四十年。実に世にも不思議なことである。実に「年老耄及をうら」んではならない。特に「志氣を専修にして、弁道功夫すべきなり」。〈委しくは本文に書かれている〉

第五段

六祖は新州の樵夫^{シヤウフ}なり、有識^{ウシキ}と称^ヲしがたし。いとけなくして父を喪^スす、老母に養育せられて長ぜり。樵夫の業^{ギヤウ}を養母の活計^{カツケイ}とす。十字の街頭^{キヤウトウ}にして一句の聞経^{モンキヤウ}よりのち、たちまちに老母をすてて大法をたづぬ。これ奇代の大器^{キタイ}なり、拔群^{ハツグン}の辨道^{ベンダウ}なり。(後略)

第六段

江西馬祖^{コウゼイ}の坐禅^{サゼン}することは二十年なり。これ南嶽^{ナンガク}の密印^{ミツイン}を稟受^{リョウジュ}するなり。⁽⁸⁾ 伝法^{デンポフ}済人^{サイニン}のとき、坐禅^{サゼン}をさしおくと道取^{ミチトリ}せず。参学^{サンガク}のはじめていたるには、かならず心印^{シンイン}を密受^{ミツジュ}せしむ。普請^{フシヤウ}作務^{サツム}のところに、かならず先赴^{センブ}す。老にいたりて懈倦^{ケケン}せず。いまの臨濟^{リンジ}は江西^{コウゼイ}の流^{リウ}なり。

第七段

雲巖和尚^{ウンガン}と道吾^{ダウゴ}と、おなじく葉山^{エツサン}に参学^{サンガク}して、ともにちかひをたてて、四十年^{シヤウジヤウ}わきを席^{セキ}につけず、一味^{イツイ}参究^{サンキウ}す。法^{ポフ}を洞山^{トウサン}の悟本^{ゴホン}大師^{ダイシ}に伝付^{デンツキ}す。洞山^{トウサン}いはく、われ欲^{シテ}打^{ウチ}成^{セウ}一^ニ片^ニ、坐禅^{サゼン}辨道^{ベンダウ}、已^ニ二十年^{ジヤウニヤウ}なり。いまその道^{ダウ}、あまねく伝付^{デンツキ}せり。

『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み(伊藤)

『正法眼藏聞書抄』口語訳の試み（伊藤）

第八段

雲居山弘覚大師、そのかみ三峯庵に住せしとき、天廚送食す。大師あるとき洞山に参じて、大道を決択してさらに庵にかへる。天使また食を再送して師を尋見するに、三日を経て師をみることをえず、天廚をまつことなし。大道を所宗とす。辦肯の志気、おもひやるべし。

天廚送食セリ、而大師洞山ニ大法決択シテ後、天使師ヲ尋見スルニ、經三日見師不得、是隔二境界ニ之故、

「天廚送食」した。そして、「雲居山弘覚」大師が「洞山」のもとで大法を「決択」した後は、「天使」が「師を尋見するに、三日を経て師をみることをえず」。これは、「大師と天使は」境界を隔てているからである。

第九段

百丈山大智禪師、そのかみ馬祖の侍者とありしより、入寂のゆふべにいたるまで、一日も為衆為人の勤仕なき日あらず。かたじけなく、一日不作一日不食のあとをのこすといふは、百丈禪師、すでに年老臘高なり、なほ普請作務のところ、に、壮齢とおなじく勵力す。（後略）

第十段

鏡清和尚住院のとき、土地神かつて師顔をみることえず。たよりをえざるによりてなり。

土地神不得見師顔、不得便之故、同弘覚大師、（七a）

「土地神」は「師顔をみることをえず、たより（手掛かり）をえざる」からである。「第八の雲居山」弘覚大師（の段）に同じである。

第十一 段

三平山義忠禪師、そのかみ天廚送食す。大顛をみてのちに、天神また師をもとむるに、みることをあたはず。

是又天廚送食ス、是又得法之後不レ能レ求レ師、大顛ハ石頭ノ弟子ナリ、今ノ義忠ハ大顛弟子、

これもまた「天廚送食す」。これもまた得法の後は「師をもとむる」ことができな。大顛〔宝通〕は石頭の弟子である。この〔三平〕義忠は大顛の弟子である。

第十二 段

後大瀉和尚いはく、我二十年在瀉山、喫瀉山飯、屙瀉山屙、不レ参瀉山道。只牧得一头水牯牛、終日露回也。

しるべし、一頭の水牯牛は、二十年在瀉山の行持より牧得せり。この師かつて百丈の会下に参学しきたれり。

しづかに二十年中の消息おもひやるべし、わするる時なかれ。たとひ参瀉山道する人ありとも、不参瀉山道の行持はまれなるべし。

二十年之間在瀉山、喫瀉山飯、屙瀉山屙、不レ参瀉山、只牧得一头水牯牛、云々、是カ今ノ行持ノ姿ニテアル、所詮至極解脱シタル詞、不会仏法ト六祖ノ被レ仰タル程ノ詞ナリ、(七七)

「二十年」の間、「在瀉山、喫瀉山飯、屙瀉山屙、不参瀉山〔道〕、只牧得一头水牯牛、……」(瀉山に在って、瀉山の飯を喫し、瀉山の屙を屙し、瀉山〔の道〕に参ぜず、只一頭の水牯牛を牧得して、……)これが、今の行持の姿である。結局この上もなく解脱している詞である。「不参瀉山道」とは「不会仏法」と六祖〔慧能〕が仰つたほどの詞である。

『正法眼藏聞書抄』口語訳の試み（伊藤）

趙州じょうしゅう観音院真際大師くわんおんいんしんさいだいし從じゆう諡し和尚じゆうしやう、とし六十一歳なりしに、はじめて発心求道をこころざす。瓶びん錫しやくをたづさへて行脚し、遍歴諸方するに、つねにみづからいはく、七歳童児ななとせどうじ、若勝にがたけ我われ者もの、我われ即問すなはちたづねレ伊い。百歳老翁ひゃくとせらうおん、不及たふ我われ者もの、我われ即教すなはちしるレ他た。

かくのごとくして南泉の道を学得する、工夫すなわち二十年なり。年至八十のとき、はじめて趙州城東観音院に住して、人天を化道すること四十年来なり。（中略）四十年のあひだ、世財をたくはへず、常住に米穀なし。あるいは粟子・稚子をひろうて食物にあつ、あるいは旋転飯食す。まことに上古龍象の家風なり、恋慕すべき操行なり。

あるとき、衆にしめしていはく、徧若へんじやく一生不離いつしやうふり叢林そうりん、不語ふご十年五載じゅうねんござい、無な三人喚さんじんわん徧へん作さく二に啞漢おんかん、已後いご、諸しよ仏ぶつ也なり。不な奈な徧へん何なに。

これ行持をしめすなり。しるべし、十年五載の不語、おろかなるに相似せりといへども、不離叢林の功夫によりて、不語なりといへども啞漢にあらざらん。仏道かくのごとし。仏道声をきかざらんは、不語の不啞漢なる道理あるべからず。しかあれば、行持の至妙しうめうは不離叢林なり、不離叢林は脱落なる全語なり。至愚のみづからは、不啞漢をしらず、不啞漢をしらず。阿誰か遮障せざれども、しらせざるなり。不啞漢なるを、得恁麼いつんまなりときかず、得恁麼なりとしらざらんは、あはれむべき自己なり。不離叢林の行持、しづかに行持すべし、東西の風に東西することなかれ。十年五載の春風秋月、しられざれども、声色透脱の道あり。その道得、われに不知なり、われに不会なり。行持の寸陰を可借許かしゃつこなりと参学すべし。不語を空然くうぜんなるとあやしむことなかれ。入之一叢林いっしゆいそうりんなり、出之一叢林しゅつしちそうりんなり。鳥路一叢林りうろいつそうりんなり。徧界一叢林へんがいいつそうりんなり。

一生不離叢林ノ姿カ、スナハチ行持ナルヘシ、仏道ナラスハ不語ヲ行持ト談事更アルヘカラス、啞漢トハヲシナリ、叢林ニ住シテ不語ナル姿カ行持ナル也、坐禪ノ当体則作仏ト云程ノ義也、諸仏也^{セスイツク}不^{ナムクヲトモ}ニ奈^{トモ}レ^{トモ}何^{トモ}一^{トモ}トハ、諸仏ヲモ物トモセスト云心也、タトヘハ仏ニモヲトルヘカラスト云心地ナリ、又入之一叢林也、出之一叢林也、鳥路一叢林也、徧界一叢林也、ト、文、叢林ト云ヘハ只一字ノ堂ト思フヘカラス、尽界叢林ナルヘシ、是則行持ナルヘシ、是ニ出入共ニ(八a)行持也、只僧堂ニ衆僧ノ出入スル義ト許ハ不^レ可^レ三^レ心得^レ也、

第十四段

大梅山は慶元府にあり、この山に護聖寺を草創す。法常禪師その本元なり。禪師は襄陽人なり。かつて馬祖の会に参じてとふ、「如何^{ナランカレシ}」は「是仏」と。馬祖はいはく、「即心是仏」と。法常このことばをききて、言下大悟す。ちなみに大梅山の絶頂にのぼりて、人倫に不群なり、草庵に独居す。松実を食し、荷葉^{かよう}を衣^えとす。かの山に小池あり、池に荷おほし。坐禪辦道すること三十余年なり。人事たえて見聞せず、年曆おほよそおぼえず。四山青又黄のみをみる。おもひやるには、あはれむべき風霜なり。師の坐禅には、八寸の鉄塔一基を頂上におく。如戴宝冠なり。この塔を落地却せしめざらんと功夫すれば、ねぶらざるなり。その塔、いま本山にあり、庫下^{くか}に

『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み(伊藤)

「一生不離叢林」(一生叢林を離れず)の姿が、そのまま「行持」であろう。「不語」が「仏道」でないならば、「不語」を「行持」と説くことは決してあるはずがない。「啞漢」とは口がきけない人である。「叢林」に住して「不語」である姿が「行持」である。坐禪の当体(叢林に住して不語であること)がすなわち作仏であるというほどの意味である。「諸仏也^{セスイツク}不^{ナムクヲトモ}ニ奈^{トモ}レ^{トモ}何^{トモ}」(諸仏もまた佛を奈何^{いかん}ともせざるなり)とは、諸仏をも、ものともしなないという意味である。たとえば、仏にも劣るはずがないという意味合いである。また、「入之一叢林なり、出之一叢林なり、鳥路一叢林なり、徧界一叢林なり」とある。「叢林」というと、ただ一棟の堂と思つてはならない。尽界が叢林である。これがすなわち行持である。これに出入するものが共に行持である。ただ僧堂に衆僧が出入する意味とだけ理解してはいけない。

『正法眼藏聞書抄』口語訳の試み（伊藤）

交割す。かくのごとく辨道すること、死にいたりて懈倦なし。かくのごとくして年月を経歴するに、塩官の会より一僧きたりて、やまにいらりて拄杖をもとむるちなみに、迷山路して、はからざるに師の庵所にいたる。不期のなかに師をみる。すなはちとふ、「和尚この山に住してよりこのかた、多少時也。」師いはく、「只見四山青又黄。」この僧またとふ、「出山路、向什麼処去。」師いはく、「随流去。」この僧、あやしむころあり。かへりて塩官に拳似するに、塩官いはく、そのかみ江西にありしとき、一僧を曾見す、それよりの消息をしらず。莫是此僧一否。

つひに僧に命じて師を請するに、出山せず。偈をつくりて答するにいはく、摧殘枯木倚寒林。幾度逢春不変心、樵客遇之猶不顧、野人那得苦追尋。つひにおもむかず。これよりのちに、なほ山奥へいらんとせしちなみに、有頌するにいはく、一池荷葉衣無尽、數樹松華食有餘、剛被世人知住処、更移茅舍入深居。つひに庵を山奥にうつす。

あるとき、馬祖ことさら僧をつかはしてとほしむ、「和尚そのかみ馬祖を参見せしに、得何道理、便住此山なり。」師いはく、「馬祖われにむかひていふ、即心是仏。すなはちこの山に住す。」僧いはく、「近日仏法また別なり。」師いはく、「作麼生別なる。」僧いはく、「馬祖いはく、非心非仏とあり。」師いはく、「這老漢、ひとを惑乱すること、了期あるべからず。任他非心非仏、我祇管即心是仏。」

この道もちて馬祖に拳似す。馬祖いはく、梅子熟也。（後略）

第十五段

五祖山の法演禪師いはく、師翁はじめて楊岐に住せしとき、老屋敗椽して風雨之敵はなはだし。ときに冬暮なり、殿堂ことごとく旧損せり。そのなかに、僧堂ことによぶれ、雪霰滿牀、居不遑処なり。雪頂の耆宿、なほ

凜雪し、彫眉ほうびの尊年しゅうねん、黻眉ふくびのうれへあるがごとし。衆僧しゅうそうやすく坐禪することなし。衲子のつす投誠とうじやうして修造しゆぞうせんことを請せしに、師翁ししゆう却けつ之のいはく、我が仏有ぶつあり言げん、時当じきやう減劫げんけつ、高岸深谷かうあんしんこく、遷変せんぺん不ふ常じやう、安得あんてく円満如意えんまんにぎ、自求じきゆう二に称足しやうそくならん。古往こわうの聖人せいじん、おほく樹下露地じゆげろじに経行きやうぎんす。古来の勝躑しやうちやくなり。履空りやくうの玄風げんふうなり。なんだち出家学道けがくがくする、做手脚しやくしやくなほいまだおだやかならず。わづかにこれ四五十歳しよなり、たれかいたづらなるいとまありて、豊屋ほうやをこととせん。つひに不ふ從じゆなり。(中略)

演和尚えんわう、あるときしめしていはく、行無ぎやうむ越えつ思し、思無しむむ越えつ行ぎやう。この語おもくすべし。日夜思にちえし之の、朝夕たつせつ行ぎやう之の。いたづらに東西南北とうせいなんぺいの風かぜにふかるるがごとくなるべからず。(後略)

五祖ハ山名、非ひ五祖六祖事ごそくろくそくじ、我が仏有ぶつあり言げん、当たう減劫げんけつ、高岸深谷かうあんしんこく、遷変せんぺん不ふ常じやう、安得あんてく円満如意えんまんにぎ、自求じきゆう称足しやうそく、云々、是ハ古往ノ聖人、多露地樹下ニ経行ス、而末代人豊屋ヲ元トシテ行道疎ナル事ヲイマシメラル、ナリ、

演和尚或時示曰、行無ぎやうむ越えつ思し、思無しむむ越えつ行ぎやう、云々、(八b)是ハ行ノ詞ヲ、行持ノ草子ナルユヘニ被引出、行与思差別ナキ道理ヲノヘラル、之、打任ハ行ハ身上ノ所作、思ハ心意識ノ上ニ談之、為破此邪念ナリ、行思共一法ナル道理不ふ可か忘わう却けつ、

『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み(伊藤)

「五祖」は山の名である。五祖(弘忍)・六祖(慧能)のことではない。「我仏有言、(時)当減劫、高岸深谷、遷変不常、安得円満如意、自求称足」(我が仏、言ること有り、(時)に減劫に当って、高岸深谷、遷変して常ならず、安くんぞ円満如意にして、自ら称足を求むることを得ん)とある。これは「古往の聖人、おほく樹下路地に経行す」。しかし、末代の人は、豊屋を居所として、行道がおろそかであることを戒められるのである。

「演和尚、あるときしめしていはく、『行無越思、思無越行』(行は思を越ゆることなく、思は行を越ゆることなし)」とある。これは、「行」の詞を、行持の巻であるから引き出されたのである。「行」と思とを入れ換えることによつて「行」と思と違くない道理を述べられるのである。普通一般には、行は身の上の所作、思は心意識の上で説く。この邪念を破るためである。行と思と共に一法である道理を忘却し

てはいけない。

第十六段

太白山宏智禪師正覚和尚の会に、護伽藍神ごがらんじんいはく、われきく、覚和尚この山に住すること十余年なり。つねに寢堂にいたりてみるとするに、不能前なりなり、未之誠也なり²⁰。まことに有道の先蹤にあひあふなり。

この天童山は、もとは小院なり。覚和尚の住裏に、道士観・尼寺・教院等を掃除して、いまの景德寺となせり。師遷化ののち、左朝奉大夫侍御史王伯庠、ちなみに師の行業記を記するに、ある人いはく、「かの道士観尼寺・教寺をうばひて、いまの天童寺となせることを記すべし。」御史いはく、「不可也、此事非僧徳しんとく矣。」と
きの人、おほく侍御史をほむ。

しるべし、かくのごとくの事は、俗の能なり、僧の徳にあらず。おほよそ仏道に登入する最初より、はるかに三界の人天をこゆるなり。（中略）いま仏祖の大道を行持せんには、大隠小隠を論ずることなく、聡明鈍癡をいふことなかれ。ただながく名利をなげすて、万縁に繫縛せらるることなかれ。光陰をすごさず、頭燃をほらふべし。大悟をまつことなかれ、大悟は家常の茶飯なり。不悟をねがふことなかれ、不悟は髻中の宝珠なり。ただまさに、家郷あらんは家郷をはなれ、恩愛あらんは恩愛をはなれ、名あらんは名をのがれ、利あらんは利をのがれ、田園あらんは田園をのがれ、親族あらんは親族をはなるべし。名利等なからんも、又はなるべし。すでにあるをはなる、なきをもはなるべき道理、あきらかなり。それすなはち一条の行持なり。（後略）

是ハ宏智禪師遷化せんげ之後、行業記ヲ注ニ、
道士観、尼寺、教寺院等ヲヤフリテ、今

これは宏智禪師の遷化の後（円寂の後である）、『行業記』を注するに、「ある人が、宏智禪師が」「道士観・尼寺・教（寺）院等」を壊して、今の景德寺としたこ

ノ景德寺トナセリ、其ヲ行業記ニ記セムトスルヲ、今ノ左朝奉大夫侍御史王佰庠云、不可也、此事非僧徳矣、仍不載行業記、此御史ヲ讚レ之、(九a)是俗能ナリ、非僧徳也、

第十七段

大慈寰中禪師いはく、説得

一丈、不如行取一尺、説得一尺、不如行取一寸²¹

これは、時人の行持おろそかにして、仏道の通達をわすれたるがごとくなるをいましむるにいたりといへども、一丈の説は不是とはあらず、一尺の行は一丈説よりも大功なるといふなり。なんぞただ丈尺の度量のみならん、はるかに須弥と芥子との論功もあるべきなり。須弥に全量あり、芥子に全量あり。行持の大節、これかくのごとし。いまの道得は、寰中の自為道にあらず、寰中の自為道なり。

説得一丈、不如行取一尺、説得一尺、不如行取一寸、云々、此詞ヲ担任テ心得ニハ、一丈ヲ説得スルヨリモ一尺ヲ行取スルハマサリタルヤウニ思付タリ、今義ハ非爾、其故ハ一丈モ行持ノ上ニ仕フ、一丈一尺モ乃至一寸モ、行持ノ上ニ談スル尺寸ナリ、ユヘニ勝劣高下ノ論ニ付可レ及、而今ノ草子ニ一尺

「説得一丈、不如行取一尺。説得一尺、不如行取一寸」(一丈を説得せんよりは、一尺を行取せんに如かず。一尺を説得せんよりは、一寸を行取せんに如かず)とある。この詞を普通一般に理解するときには、一丈を説得するよりも一尺を行取するのはまさっているように思ってしまう。ここの意味はそうではない。そのわけは、一丈も行持の上でつかう。一丈一尺も或いは一寸も、行持の上で説く尺寸である。だから勝劣高下の論に及ぶべきでない。そうではあるが、この巻に「一尺の行は一丈の説よりも大功なり」というので、やはり勝劣があるようである。前後が一致

『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み(伊藤)

ノ行ハ一丈ノ説ヨリモ大功也ト云ヘハ、猶勝劣アルニ、タリ、前後ノ參（九b）差ニモ聞タリ、是ハ行持ト云草子ノ上ナルユヘニ、暫一尺ノ行ハ一丈ノ説ヨリモ大功トト云トモ、サレハトテ始終更勝劣浅深ノ義不可有、随上ニ一丈ノ説ハ不是トニハアラスト被_レ釈分明_ニ、又行ノ位ハアサク、証ノ位ハ深シト思ヘリ、行証共只同タケ、今ノ一丈一尺、ミミ一寸等ノ詞ニ、此道理符合スル_ニ、又須弥与_二芥子_一、仏法ニハ只一マト習_ミ、打任ハ天地懸隔相違ノ喩トナレリ、須弥ニ全量アリ、芥子ニ全量アリト云、此心地ナリ、（二〇a）コノ道得ハ、實中ノ自為道ニアラス、實中ノ自為道ト云ヘリ、此道得ハ、實中ノ自為道許ニアラス、三世諸仏祖等ノ自為道ナリ、コノ道理ナルユヘニ、又實中ノ自為道トモ暫イハル、_ニ、

しないように受け取られる。これは行持の巻の上であるから、かりに、「一尺の行は一丈の説よりも大功なり」と言うけれども、そうであるからと言って、常に決して勝劣浅深の意味があるはずがない。したがって、上に「一丈の説は不是とはあらず」と釈かれるのは明らかである。また「一般には」行の位は浅く、証の位は深いと思っている。行も証も共に同じ程である。今の一丈一尺、一尺一寸等の詞に、この道理は符号するのである。また、「須弥」と「芥子」とは、仏法ではただ一つであると習うのである。普通一般には、天と地がはるかに隔たっているほど相違していることの喩となる。「須弥に全量あり、芥子に全量あり」と言うのはこの意味合いである。この「道得は、實中の自為道にあらざ、實中の自為道なり」とある。この「道得は、實中の自為道」（實中が自ら発したことば）ばかりではない、三世諸仏祖等の自為道である。この道理であるから、また「實中の自為道なり」ともかりに言われるのである。

第十八段

洞山悟本大師道、説_二取行不得底_一、行_二取説不得底_一。

これ高祖の道なり。その宗旨は、行は説に通ずるみちをあきらめ、説の行に通ずるみちあり。しかあれば、終

日とくところにて終日おこなふなり。その宗旨は、行不得底を行取し、説不得底を説取するなり。

説取行不得底、行取説不得底云々、是ハ説与レ行ヲ各別ニ被レ説ク、説ノ時ハ行ハカクレ、行ノ時ハ説ハカクルヘシ、一方ヲ証スルトキハ一方ハクラキ道理ナルヘシ、然而前ニ詞不レ可レ違ク、(二〇b)

「説取行不得底、行取説不得底」(行不得底を説取し、説不得底を行取す)とある。これは、説と行とをそれぞれ別に説かれるのである。説の時は行はかくれ、行の時は説はかくれるはずである。「一方を証するときは、一方はくらき道理」である。そうであるから、前「(の段)」に「おける」「説得一丈、不如行取一尺。説得一尺、不如行取一寸」と、詞が違うはずがない。

第十九段

雲居山弘覚大師、この道を七通八達するにいはく、説時無_二行路_一、行時無_二説路_一。

この道得は、行説なきにあらず。その説時は、一生不離叢林なり。その行時は、洗頭到雪峯前なり。説時無行路、行時無説路、さしおくべからず、みだらざるべし。

古来の仏祖いひきたれることあり、いはゆる、若人生ケラシコト 百歳ナランニ、不_レ会_二諸仏機_一、未_レ若_三生ケラシコト 一日而能決_二了_一之_二。

これは一仏二仏のいふところにあらず、諸仏の道取しきたれるところ、諸仏の行取しきたれるところなり。(後略)

是又説行之心得ヤウ、前ニ不_レ可_レ違ク、所詮一生不_レ離叢林、洗_レ頭到_二雪峯前_一

これもまた説と行との理解の仕方は、前「(の段)」に違はずがないのである。結局、「一生不離叢林」(一生叢林を離れず)「洗頭到雪峯前」(洗頭して雪峯の前に到

『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み(伊藤)

以テ行持ト談ク、一生不離叢林事、趙州段ニ委クハシクセ載了、説時ニハ行路ナク、行時ニハ説路ナキ、然而説時ナキニアラス、不離叢林ノ姿説時ク、行路又無キニアラス、洗頭到雪峯姿ヲ以テ行路トハ談也、又若人生百歳、不会諸仏機、未レ若キ生二日而能決コ了之、此文ハ法句經文、依此文阿難入定寂滅シ給云々、其故ハ、或時此文ヲ唱テ人ノトヨリ（二一a）ケルヲ聞給ヘハ、若人生百歳、不見水老鶴、未レ若キ生一日、不能觀見之、如レ此誦シテ過ケルアヒタ、阿難此誦ムモノヲヨヒ入テ、此文ハ經文、ワタクシノ詞不可入、アシク誦スルベトテ如レ經文ナヲサレタリケルヲ、任ニ阿難教誦シケル程ニ、又或時先度アシク誦セシヤウニ唱テ過ケルアヒタ、又ヨヒ入テナト先度ヲシヘシマ、ニハ不レ誦シテ、如レ本アシクハ誦スルソト被レ仰ケレハ、先度御教訓ノ定ニ誦スレハ僻事、只如レ先度可レ誦ト人ノ申シ間、如此誦スルベト答申ケリ、其時仏入滅シ給事（二一b）不レ久ニ、是程ニ皆人邪見ニ墮セリ、

る）を行持と説くのである。「一生不離叢林」のことは、趙州の段に委しく載せた。説時に行路がなく、行時に説路がないのである。そうではあるが、説時がないのではない。「（一生）不離叢林」の姿が「説時」である。行路もまたないのではない。「洗頭到雪峰（前）」の姿を「行路」と説くのである。

また「若人生百歳、不会諸仏機、未若生一日、而能決了之」（若し人、生けらんと百歳ならんに、諸仏の機を会せずんば、未だ生けらんこと一日にして、能く之を決了せんにはしかじ）とある。この文は『法句經』の文である。この文によつて阿難は入定寂滅された。そのわけは、ある時、この文を唱えて人が通つたのを聞かれたところ、「若人生百歳、不見水老鶴、未若生一日、而能觀見之」（若し人、生けらんと百歳ならんに、水老鶴を見ずば、未だ生けらんこと一日にして、能く之を觀見せんにはしかじ）と、このように誦して通り過ぎたため、阿難はこの誦す者呼び入れて、「この文は經文である。自分の詞を入れてはならない。（おまえは）誤つて誦している」と言つて、經文のように直されたので、阿難の教えに従つて誦したところが、また、ある時、先日誤つて誦したように唱えて通り過ぎたため、また呼び入れて「どうして先日教えたように誦さないで、もとのように誤つて誦しているのか」と仰つたところ、「先日の御教訓のように誦すと間違ひである。ただもとのように誦すべきであると人が申したため、このように誦すのです」と答え申し上げた。その時は、仏が入滅されて久しくないのに、これほどに皆邪見に墮していた。このような世に住しても無意味であるといつて、（阿難は）寂滅された。……

カ、ラム世ニ住シテ無シ詮トテ、寂滅給、云々、

第二十段

南嶽大慧禪師懷讓和尚、そのかみ曹谿に参じて、執待すること十五秋なり。しかうして伝道授業すること、一器水瀉一器なることをえたり。古先の安履、もとも慕古すべし。十五秋の風霜、われをわづらはすおほかるべし。しかあれども、純一に究辦す。これ晩進の龜鏡なり。寒炉に炭なく、ひとり虚堂にふせり。涼夜に燭なく、ひとり明窓に坐する。たとひ一知半解なくとも、無為の絶学なり。これ行持なるべし。(後略)

第二十一段

香巖の智閑禪師は、(中略)一日わづかに道路を併浄するに、礫のほとぼしりて、竹にあたりて声をなすによりて、忽然として悟道す。(後略)

礫ノホトハシリテ竹ニアタリテ声ヲナスニヨリテ、忽然トシテ悟道スルハ、此禪師事也、

「礫のほとぼしりて、竹にあたりて声をなすによりて、忽然として悟道す」るのは、この「香巖智閑」禪師のことである。

第二十二段

臨済院慧照大師は、黄檗の嫡嗣なり。黄檗の会にありて三年なり。純一に辨道するに、睦州陳尊宿の教訓によりて、仏法の大意を黄檗にとふこと三番するに、かさねて六十棒を喫す。なほ勵志たゆむことなし。大愚にい

『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み(伊藤)

『正法眼藏聞書抄』口語訳の試み（伊藤）

たりて大悟することも、すなはち黄檗・睦州両尊宿の教訓なり。（中略）
師在黄檗、与黄檗裁杉松次、黄檗問師曰、「深山裏裁許多樹作麼。」師曰、「一与二山門、為二境致、二与二後人、作二標榜。」乃将鐵拍、地両下。黄檗拈起拄杖曰、「雖然如是、汝已喫我三十棒了也。」師作嘘嘘声。黄檗曰、「吾宗到汝大興於世。」（後略）

陳尊宿ノ教訓ニ依テ、仏法ノ大意ヲ
黄檗ニ問ニ、三番スルニ一番ニ二十棒
ツ、都合六十棒ヲ与ギ、勵志タクム事
ナシ、大愚ニイタリテ大悟ス（二）ル
事モ、スナハチ黄檗睦州両尊宿ノ教訓ニ
ヨリテ、黄檗与臨濟ニ問答、文ニツフ
サナリ、

「陳尊宿の教訓によりて、仏法の大意を黄檗にとふ」に、「三番するに」、一番に二十棒ずつ、合計六十棒を（黄檗は臨済に）与えた。「勵志たゆむことなし。大愚にいたりて大悟することも、すなはち黄檗・睦州両尊宿の教訓」によつてである。黄檗と臨済との問答は、本文に詳らかである。

第二十三段

唐宣宗皇帝は、憲宗皇帝第二の子なり。少而より敏黠なり。よのつねに結跏趺坐を愛す、宮にありてつねに坐禅す。穆宗は宣宗の兄なり。穆宗在位のとき、早朝罷に、宣宗すなはち戯而して、龍牀にのぼりて搢群臣勢をなす。大臣これをみて、心風なりとす。すなはち穆宗に奏す。穆宗みて、宣宗を撫而していはく、我弟乃吾宗之英胄也。ときに宣宗、としはじめて十三なり。穆宗は長慶四年晏駕あり。穆宗に三子あり。いはゆる、一は敬宗、二は文宗、三は武宗なり。敬宗父位をつぎて三年に崩す。文宗継位するに一年といふに、内臣謀而、これを易す。武宗即位するに、宣宗いまだ即位せずして、をひのくににあり。武宗つねに宣宗をよぶに癡叔と

いふ。武宗は会昌の天子なり、仏法を廢せし人なり。武宗あるとき宣宗をめして、昔日ちちのくらるにのぼりしことを罰して、一頓打殺して、後華園のなかにおきて、不浄を灌するに復生す。つひに父王の邦をはなれて、ひそかに香嚴の閑禪師の会に参じて、剃頭して沙弥となりぬ。しかあれど、いまだ不具戒なり。志閑禪師をもととして遊方するに、蘆山にいたる。ちなみに志閑みづから瀑布を題してはいはく、穿崖透石不辭勞、遠地方知出処高。この兩句をもて沙弥を釣他して、これいかなる人ぞとみるとするなり。沙弥これを統していはく、溪澗豈能留得住、終歸三大海。作一波濤。この兩句をみて、沙弥はこれつねの人にあらざとしりぬ。

のちに杭州塩官齊安國師の会にいたりて、書記に充するに、黃檗禪師、ときに塩官の首座に充す。ゆゑに黃檗と連単なり。黃檗ときに仏殿にいたりて礼仏するに、書記いたりてとふ、「不著レ仏求、不著レ法求、不著レ僧求、長老用レ礼何為。」かくのごとく問著するに、黃檗便掌して、沙弥書記にむかひて道す、「不著レ僧求、不著レ法求、不著レ僧求、常礼 如是事。」かくのごとく道しをはりて、又掌すること一掌す。書記いはく、「太麤生なり。」黃檗いはく、「遮裏是什麼所在、更說什麼麤細。」また書記を掌すること一掌す。書記ちなみに休去す。

武宗ののち、書記つひに還俗して即位す。武宗の廢仏法を廢して、宣宗すなはち仏法を中興す。宣宗は即位在位のおひだ、つねに坐禪をこのむ。未即位のとき、父王のくにをはなれて、遠地の溪澗遊方せしとき、純一に辦道す。即位ののち、昼夜に坐禪すといふ。まことに、父王すでに崩御す、兄弟また晏駕す、をひのために打殺せらる、あはれむべき窮子なるがごとし。しかあれども、勵志うつらず辦道功夫す。希代の勝躡なり、天真の行持なるべし。

心風トト物狂トト云心ナリ、沙弥閑禪

「心風なり」とは「物狂いなり」という意味である。沙弥は「二志」閑禪師をと

『正法眼藏聞書抄』口語訳の試み（伊藤）

師ヲ為レ友遊方スルニ、盧山ニイタルニ、志閑沙弥ヲ心ミムトテ瀑布ヲ題シテイハク、穿レ岸透レ石不レ辞勞、遠地方知出処高、此両句ヲ以テ沙弥ヲミムトスル、沙弥是ヲ統シテイハク、溪澗豈能留一得一住、終歸大海作一波濤、見此両句、沙弥是非常（二二b）人ト知之、黄檗トキニ仏殿ニイタリテ礼拝スルニ、沙弥イタリテイフ、不著仏求、不著法求、不著僧求、長老用礼何為、如此問著スルニ、黄檗便掌シテ、沙弥書記ニムカイテ道ス、不著求、不著法求、不著僧求、常礼如是事、如此道シヲハリテ、又掌スル事一掌ス、書記イハク、太麤生、是ハ風性常住無所不周底ト問シニ、和尚重テ扇ヲ仕シ程ノ道理、黄檗イハク這裏是什麼所在、更説ニ什（二三a）麼麤細、マタ書記ヲ掌スル事一掌ス、書記チナミニ休去ス、武宗ノ、チ書記ツイニ還俗シテ即位ス、（二三b）

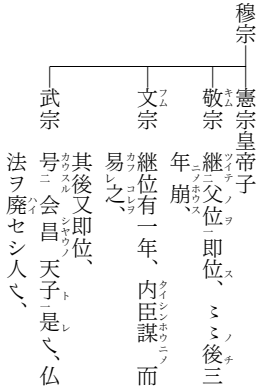
もととして遊方するに、盧山にいたる」に、志閑は沙弥をこころみようととして、「瀑布を題していはく、穿崖透石不辭勞、遠地方知出処高（崖を穿ち石を透つて勞を辞せず、遠地方に知りぬ、出処の高きことを）。この両句をもて、沙弥を」（どの様な人であるか）「みんなとするなり」。「沙弥これを統していはく、溪澗豈能留得住、終歸大海作波濤（溪澗、豈に能く留め得て住めんや、終に大海に歸して波濤と作る）。この両句をみて、沙弥はこれつねの人にあらずと」知った。

「黄檗ときに仏殿にいたりて」礼拝するときに、沙弥がやつて来て言った。「不著仏求、不著法求、不著僧求、長老用礼何為」（仏に著いて求めず、法に著いて求めず、僧に著いて求めず、長老、礼を用つて何にか為ん）。かくのごとく問著するに、黄檗便掌して、沙弥書記にむかひて道す、『不著仏求、不著法求、不著僧求。常礼如是事』（仏に著いて求めず、法に著いて求めず、僧に著いて求めず、常に礼することは是の事の如し）。かくのごとく道しをはりて、又掌すること一掌す。書記いはく、『太麤生（はなはだ粗雑である）なり』。これは（ある僧が）「（どの様なことが）風性常住無所不周底（の道理か）」と尋ねたときに、「麻谷山宝徹」和尚は重ねて扇を使ったほどの道理である。「黄檗いはく、『遮裏是什麼所在、更説什麼麤細（遮裏はれ什麼の所在ぞ、更に什麼の麤細とか説かん）。また書記を掌すること一掌す。書記ちなみに休去す。武宗のち、書記つひに還俗して即位す』。

唐憲宗皇帝

長慶四年宴駕、
宣宗即位時召宣宗、昔日父
位登事ヲ罰ス、一頓打殺而
置後花園中灌_{ソク}不_ク淨_ニ復_シ
生ス、終父王ノ邦ヲ離テ、
窃_ヒ登_リ香巖_ニ志閑禪師會_ニ
成_リ沙弥、然而未_レ具_レ戒、後
杭州塩官ノ所ニ至テ書記ニナ
リヌ、黄檗于時塩官ノ首座、
黄檗与_テ書記隣_ニナリ、(一四

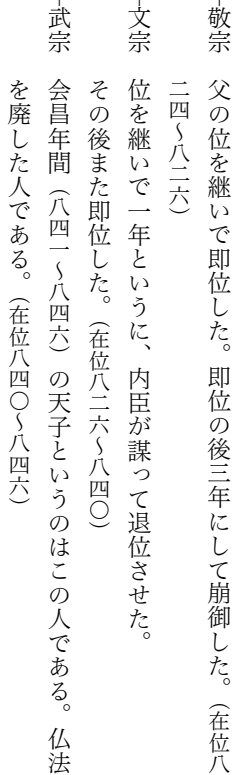
a)



唐憲宗皇帝 (在位八〇五〜八二〇)

長慶四年(八二四)崩御。(在位八二〇〜八二四)
宣宗 穆宗が即位した時、宣宗を呼び、昔、父の天子の座に登ったことを罰
して、一打ちに打ち殺して、後花園の中に置いて、小便を灌いだとこ
ろ、再び生き返った。終に父である王の国を離れて、窃かに香巖志閑
禪師の会に参じて、沙弥となった。そうではあるが、まだ具足戒を受
けてはいなかった。後に杭州塩官禪師の所に行つて書記になった。黄
檗はその時、塩官の首座であつた。黄檗と書記とは単が隣であつた。
(在位八四六〜八五九)

穆宗



『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み(伊藤)

『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み（伊藤）

第二十四段

雪峯真覺大師義存和尚、かつて発心よりこのかた、掛錫の叢林、および行程の接待、みちはるかなりといへども、ところをきらはず、日夜の坐禪おこたることなし。雪峯草創の露堂堂にいたるまで、おこたらずして坐禪と同死す。咨参のそのかみは、九上洞山、三到投子する、希世の辨道なり。行持の清嚴をすすむるには、いまの人、おほく雪峯高行といふ。雪峯の昏昧は諸人とひとしいへども、雪峯の伶俐は諸人のおよぶところにあらず。これ行持のしかあるなり。いまの道人、かならず雪峯の澡雪をまなぶべし。しづかに雪峯の諸方に参学せし筋力をかへりみれば、まことに宿有靈骨の功德なるべし。（後略）

正法眼蔵行持第十六上

仁治癸卯正月十八日、書寫了。

同三月八日、校点了。懷裝

- (1) 『正法眼蔵行持』は長文であるので、『抄』『聞書』で注釈している段は、注釈している箇所を中心として、注釈していない長文の段は、はじめの箇所のみを挙げ、他は省略した。
- (2) 「真父の家郷に宝財をなげすて、さらに他国踏躡の窮子となる」は、『妙法蓮華經』卷二、信解品の「長者窮子の比喻」（正蔵九・一六b～一七b）を背景にした記述である。「真父」は釈尊、「宝財」は行持、「窮子」は行持をさしおく者を意味している（安良岡康作『正法眼蔵・行持（上）』講談社〈学術文庫〉、二〇〇二年一月、五九頁）。
- (3) 十九歳出家、三十歳成道は、『景德伝燈録』卷一、釈迦牟尼仏章による。
年十九欲求出家、（中略）普集経云、菩薩於二月八日明星出時、成仏号天人師、時年三十矣。（正蔵五一・二〇五b）
- (4) 「大地有情同時成道」の語は、「発菩提心（発無上心）」の巻に次のように引かれる。

釈迦牟尼仏言、明星出現時、我与大地有情、同時成道。(道元全上・五二八頁)

この出典はこれまで不詳であったが、石島尚雄「大地有情同時成道一再考」(曹洞宗宗学研究所紀要) 第二二号、一九九八年十月) によって、『建中靖国統灯録』卷三の開先善遍の語の中にあることが明らかとなった。

開堂日、上省白槌罷、師云。千聖出来、也祇是稽首讚歎。諸代祖師提掇不起。是故始從迦葉、迄至山僧、二千余年。月燭慧燈、星排道樹。人天普照、凡聖齊榮。且道承甚麼人恩力。老胡也祇道、明星出現時、我与大地有情、同時成道。如是則彼既丈夫我亦爾。孰為不可。良由諸人、不肯承当、自生退屈。所以便推排一人半箇先達、出来遞相開発、也祇是与諸人、作箇証明。(統藏一三六・三六b c)

ただし、開先善遍が何からこの語句を引用したかは不明である。

(5) 「ヲ」とあるが「ハ」と改めるべきであろう。玉林寺本・寛政五年書写本には「ハ」とある。

(6) 十二頭陀に関する記述は『大比丘三千威儀經』(正藏二四・九一九b) による。

(7) 『摩訶止観』卷一上

法付脇比丘。比丘出胎髮白、手放光取経。(正藏四六・一a)

『摩訶止観輔行伝弘決』卷一之一

法付脇比丘。比丘在胎經六十年、生而髮白。誓不屍臥、名脇比丘。乃至暗中手放光明、以取経。(正藏四六・一四六a)

(8) 『景德伝燈録』卷六、馬祖道一章。

唐開元中、習禪定於衡嶽伝法院、遇讓和尚。同參九人、唯師密受心印。(正藏五一・二四五c)

(9) 『天聖伝燈録』卷八、百丈懷海章。

師凡作務執勞、必先於衆。衆不忍其勞、密取作具而請息之。師云、吾無德矣。争合勞人。既徧求作具、不獲而亦不食。故有一日不作、一日不食之言。(統藏一三五・三二九c)

(10) 『景德伝燈録』卷九、長慶大安章。

安在瀉山三十来年、喫瀉山飯、厠瀉山屎、不学瀉山禪。只看一頭水牯牛。若落路入草便牽出。若犯人苗稼即鞭撻。調伏既久。可憐生、受人言語。如今變作箇露地白牛。常在面前終日露迥迥地、趁亦不去也。(正藏五一・二六七c)

(11) 『宗門統要集』卷一、六祖慧能章。

『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み(伊藤)

『正法眼藏聞書抄』口語訳の試み（伊藤）

師因僧問、黃梅意旨、什麼人得。云、会仏法人得。僧云、和尚還得不。云、我不得。云、和尚為甚不得。云、我不会仏法。（三九 a b）

(12) 『古尊宿語要』所収の『趙州録』卷上。

其後自攜瓶錫、遍歷諸方。常自謂曰、七歲童兒勝我者、我即問伊。百歲老翁不及我者、我即教他。年至八十、方住趙州城東觀音院（中略）僧堂無前後架、旋宮齋食。繩床一脚折、以燒斷薪用繩繫之。每有別制新者、師不許也。住持四十來年、未嘗費一封書告其檀越。（柳田聖山編『禅学叢書之一』『無著校写古尊宿語要』二九 b）

(13) 『聯燈会要』卷六、趙州從諗章。

示衆云、爾若一生不離叢林、不語十年五載、無人喚爾作啞漢、已後仏也不奈爾何。（統藏一三六・二六四 d）
なお、『古尊宿語要』所収の『趙州録』は、次のようである。

師又云、若一生不離叢林、不語十年五載、無人喚爾作啞漢、已後仏也不奈爾何。爾若不信截取僧頭去。（柳田聖山編『古尊宿語要』三二 a）

(14) 『景德伝燈録』卷七、大梅法常章。

明州大梅山法常禪師者、襄陽人也。姓鄭氏。幼歲從師於荊州玉泉寺、初參大寂。問、如何是仏。大寂云、即心是仏。師即大悟。唐貞元中居於天台山余姚南七十里。梅子真旧隱。時塩官会下一僧入山采拄杖、迷路至庵所。問曰、和尚在此山來多少時也。師曰、只見四山青又黃。又問、出山路向什麼處去。師曰、隨流去。僧婦説似塩官。塩官曰、我在江西時曾見一僧、自後不知消息。莫是此僧否。遂令僧去請出師。師有偈曰、

摧殘枯木倚寒林、幾度逢春不変心、樵客遇之猶不顧、野人那得苦追尋。

大寂聞師在山、乃令一僧到問云、和尚見馬師得箇什麼便住此山。師云、馬師向我道即心是仏、我便向遮裏住。僧云、馬師近日仏法又別。師云、作麼生別。僧云、近日又道非心非仏。師云、遮老漢惑乱人未有了日。任汝非心非仏、我只管即心是仏。其僧迴拳似馬祖。祖云、大衆、梅子熟也。（正藏五一・二五四 c）

(15) 『明州大梅法常禪師語録』。

遷居頌

一池荷葉衣無尽、數樹松花食有余、剛被世人知住處、更移却舍入深居。（『金沢文庫資料全』仏典卷一 禅籍篇・一八 b）

(16) 『禪林宝訓』卷一。

演祖曰、師翁初住楊岐、老屋敗椽、僅蔽風雨。適臨冬莫(暮カ)、雪霰滿床、居不遑処。衲子投誠願充修造。師翁却之曰、我有言、時当減劫、高岸深谷、遷變不常、安得円満如意、自求称足。汝等出家学道、做手脚未穩。已是四五十歳、詎有聞工夫、事豊屋耶。竟不從。翌日上堂曰、楊岐乍住屋壁疎、滿床尽撒雪珍珠、縮却項、暗嗟吁、翻憶古人樹下居。(正藏四八・一〇一八c)

(17) 「老屋敗椽、僅蔽風雨」とあつたが、乾坤院本等の七十五卷本には「老屋敗椽して風雨之蔽はなほだし」とあることが脚注によつて知られるので改めた。

(18) 『禪林宝訓』卷一。

演祖曰、衲子守心城、奉戒律、日夜思之、朝夕行之、行無越思、思無越行。有其始而成其終、猶耕者之有畔、其過鮮矣。(正藏四八・一〇一八c)

(19) 「威」は「減」の誤りであるから、訳では改めた。永平寺本・玉林寺本・寛政五年書写本には「減」とある。

(20) 『宏智禪師広録』卷九、勅諭宏智禪師行業記。

一日小行者、僵仆於地言曰、我護伽藍神也、与太白神角力。可令僧衆誦呪助我。或曰、何不以告堂頭。神曰、我聞覺和尚住此十余年矣。每至寢堂欲見之、即戰慄不能前、竟未之識也。(正藏四八・一二〇c~一二一a)

(21) 『宗門統要集』卷四、大慈覺中章。

師示衆云、説得一丈、不如行取一尺。説得一尺、不如行取一寸。洞山云、説取行不得底、行取説不得底。雲居云、行時無説路、説時無行路。不説不行時、合行什麼路。洛浦云、行説俱到即本事無行説俱不到即本事在。(四二b)

(22) 『景德伝灯録』卷一、僧伽難提章。

仏言、若人生百歳、不会諸仏機、未若生一日、而得決了之。(正藏五一・二二二b)

『法句経』にはこの偈はない。ただし、次のような類似の偈は存在する。

若人壽百歳、遠正不持戒、不如生一日、守戒正意禪。
若人壽百歳、邪偽無有智、不如生一日、一心学正智。
若人壽百歳、懈怠不精進、不如生一日、勉力行精進。

『正法眼蔵聞書抄』口語訳の試み(伊藤)

『正法眼藏聞書抄』口語訳の試み (伊藤)

若人寿百歳、不知成敗事、不如生一日、見微知所忌。

若人寿百歳、不見甘露道、不如生一日、服行甘露味。

若人寿百歳、不知大道義、不如生一日、学推仏法要。(正蔵四・五六四c)

『付法藏因縁伝』巻二にこの話はあるが、偈は一致しない。

最後至一竹林中、聞有比丘誦法句偈。

若人生百歳、不見水老鶴、不如生一日、而得覩見之。

阿難聞已慘然而歎。世間眼滅何其速哉。煩惱諸惡如何便起。違返聖教自生妄想無有慧明。常處癡闇、永当流転生死大海、為老

病死之所悩逼。便語比丘此非仏語、不可修行。汝今当知、二人謗仏。一雖多聞而生邪見、二不解深義顛倒妄説。有此二法為自

毀傷。不能令人離三惡道。汝今当聰、我演仏偈。

若人生百歳、不解生滅法、不如生一日、而得解了之。

爾時比丘即向其師説阿難語。師告之曰、阿難老朽知慧衰劣、言多錯謬、不可信矣。汝今但当如前而誦。阿難後時聞彼比丘在竹

林下猶誦前偈即問其意。答言、尊者吾師告我、阿難老朽言多虚妄、汝今但当依前誦習。阿難思惟、彼輕我言或受余教。即入三

昧。(正蔵五〇・二〇二c)

(23) 『天聖広燈録』巻一〇、臨濟義玄章。

師又因裁松次、槩問、深山裡裁許多松作什麼。師云、一与山門作景致、二与後人作標榜。道了將鏹頭打地一両下。槩云、雖然

如是、子已喫吾三十棒了也。師又以鏹頭打地両下嘘嘘。槩云、吾宗到汝大興於世。(統蔵一三五・三四二d)

(24) 「香嚴の閑禪師」「志閑禪師」とあるが、これは香嚴智閑(〓八九八)のことであろうか。

(25) 泉福寺本・森福寺本(正法苑 統一〇・三六七b)・総持寺本は「岸」とするが、他は「崖」とする。訳では「崖」とした。

(26) 『宗門統要集』巻三、麻谷宝徹章。

師一日使扇次、有僧問、風性常住無処不周。和尚為甚却揺扇。師云、爾只知風性常住且不知無処不周。云、作麼生は無処不周

底道理。師却揺扇。僧作礼。師云、無用処師僧、著得一千箇、有什麼益。(二一a)

これは『現成公案』でも取り上げられる。

麻谷山宝徹禪師、あふぎをつかうちなみに、僧きたりてとふ、「風性常住、無処不周なり、なにをもてかさらに和尚あふぎを

- つかふ。「師いはく、「なんぢただ風性常住をしれりとも、いまだところとしていたらずといふことなき道理をしらず」と。僧いはく、「いかならんかこれ無処不周底の道理。」ときに師、あふぎをつかふのみなり。僧礼拝す。(道元全上・一〇頁)
- (27) 以下の系譜と各皇帝についての記述は、「行持」の巻の本文によったもの。
- (28) 「嚴」は「嚴」の誤りであるから、訳では改めた。

(一)二〇〇二・一〇・三〇